

『絵入源氏』三種類の字母——「帚木」巻から——

Differences across three kinds of “*virigenji*” printing type: A case study of *Hahakigi-maki*

沼尻 利通

NUMAJIRI Toshimichi

(国語教育)

(平成二十五年九月三十日受理)

はじめに

書承という視点からみると、『絵入源氏』は貴重な素材を提供してくれる資料である。『絵入源氏』は、山本春正により出版された、挿絵入りの『源氏物語』である。『絵入源氏』は、山本春正により慶安本が出版され、それをもとに、横長の万治本、無刊記の小本がそれぞれつくられた。万治本や小本の出版には、慶安本を制作した山本春正は関与してはおらず、それぞれ別の人物によって作られている。無刊記の小本は、制作年時が不明で、万治本より後に作られているが、万治本の影響は受けていないと考えられる。慶安本をもとに、万治本が作られ、慶安本をもとに、小本が作られたのである。万治本、小本ともに慶安本を素材として、新しい本を生みだしたことになる。『絵入源氏』は、書承関係が明確である。このことから、三本の比較により、どのように『源氏物

語』は増殖していくのか、書承を考察する手がかりとなる。

万治本、小本ともに慶安本をもとにしているならば、「ほぼ同じ」本文が生まれるはずである。しかし、三本の間には、表記や本文に微妙な異同がある。「ほぼ同じ」の「ほぼ」がどの程度を指すのかは問題となるわけだが、三本が「まったく同じ」とは到底言えないことは明らかである。これは当たり前で、判型が異なる以上、表記が異なってくるのは当然の帰結だからだ。

『絵入源氏』三種類のそれぞれのテキストの持つ性格は、その判型の影響が大きい。三本の表記の異同は、別稿で論じた¹が、別の視点も交えて簡単に確認しておきたい。万治本は漢字への志向が強い。横型の判型は綴じ目が少なく、製本の手間がかからない。一丁におさめる文字数も多くでき、安く出版できる。文字数の節減は紙の節減につながることから、万治本は漢字を多用した。慶安本がひらがなで表記するところ

を、万治本は漢字に改める傾向がある。万治本は、漢字を多用し、紙を節約したのである。このことを、具体的に「帚木」巻の一丁をとりあげて考えていきたい。慶安本の「帚木」巻の一丁は、字数二五三字、一丁ウも、字数二五三字、ともに一一行である。慶安本の一丁は、合計字数五〇六字になる。万治本の一丁は二六八字、一丁ウは二七一字、ともに一六行。万治本の一丁は、合計字数五三九字になる。小本の一丁は二五一字、一丁ウは二五二字、行数はともに一一行。小本の一丁は、合計字数五〇三字である。一丁あたり、慶安本は五〇六字、小本は五〇三字の文字がおさめられている。それに対して万治本は五三九字である。慶安本や小本と比較すると、万治本の方が、一丁のなかに、三〇字以上余分に文字をおさめることができる。このことから、物語がすすむにつれて、「帚木」巻の慶安本と万治本の丁数にはずれが生じる。「帚木」巻は、慶安本、小本ともに五一丁で終わる。万治本は四六丁で終わっており、万治本の方が丁数が少なくすんでいる。それだけ紙を節約できたことになる。万治本の、横本という判型は、より安く手間のかからない出版を目指してのものとわかる。一方、慶安本と小本は一丁の字数がほぼ同じ数であることから、小型本の小本は、慶安本の縮小版を目指してつくられたようである。ただ、現在の文庫本ほどの大きさであるから、慶安本のふりがな付き漢字や漢字の表記をそのまま継承できない。漢字を小型化すると、文字が潰れてしまい、印刷が難しい。そのためひらがな表記を増やしていく必要があった。したがって、小本はひらがなへの志向の強いテキストとなる。物理的な理由のほかに、小本の制作者の姿勢にも理由を求めることができる。小本の制作者は、源氏物語に親しんでいた人物で、慶安本の本文をそのまま継承することはなく、一部を他本により校訂している。小本の制作者は、源氏物語の写本

〈表1〉『絵入源氏』三種類（「帚木」巻）及び写本の使用文字数

	総文字数	ひらがな	漢字	比率
慶安本	20680	19122	1558	92% / 8%
万治本	20412	18551	1861	91% / 9%
小 本	21118	19979	1139	95% / 5%
東洋大	20751	19461	1290	94% / 6%
尾州家	21453	20371	1082	95% / 5%

※「比率」は、ひらがな / 漢字のそれぞれのパーセンテージを示した。

にも親しんでおり、慶安本の革新的な本文には敬意を払いながらも、しかし写本のようにひらがなを多用する保守的な本文に親しみを感じていたことから、小本にひらがなを多く用いたとも推測できる。いずれにせよ、万治本は漢字、小本はひらがなへの強い志向が見えるのである。

その傾向は、使用文字数からも確認できる。「帚木」巻に限定して、『絵入源氏』の慶安本、万治本、小本、および鎌倉期の写本とされる東洋大学附属図書館蔵の伝阿仏尼本（以下、東洋大学本³⁾、尾州家河内本

源氏物語（以下、尾州家本⁴⁾）の総文字数を調査し、その結果を併せ〈表1〉にまとめてみた。総文字数、ひらがなの字数、漢字の字数、およびひらがな / 漢字の比率の一覧表である。総文字数に対して、ひらがなの比率と漢字の比率を見比べると、写本の東洋大本、尾州家本と版本の小本は共通する。写本はひらがなの比率が高く、漢字の比率は低い。ひらがなと漢字の比率から言えば、『絵入源氏』三本のなかで、小本が写本に近い本といえる。漢字の多さは、万治本が多く、次いで慶安本。万治本は漢字が多く、小本はひらがなが多い本文なのである。

源氏物語本文の漢字含有率を調査した斎藤達哉によれば、「漢字含有率が低いということは、表記上の古態であること

の判断材料となる。」と結論づけている。「判断材料となる」との慎重な言い回しからも察せられるように、本文の漢字含有率の高低のみでは、その古態を判断することはできない。漢字の含有率の低さは、写本の古態を判断する一つの根拠とはなるが、決定的な根拠にはなりえない。

『絵入源氏』のケースをみても明らかのように、漢字含有率が低ければ古態ならば、小本、慶安本、万治本という順で成立していなければならぬ理屈になる。小本、万治本は、版面の形の都合から、漢字、ひらがなの使用比重が変化したのであり、これヒントとすれば、漢字含有率を考えるさいには、親本をどのようなサイズに転写するのかによっても変動しうるので、書写時の状況までも想定しなければならないことになる。ともかくも、漢字含有率からみると、小本の写本ばさ、すなわち写本性が際立っていることは確かである。逆から見ると、慶安本、万治本は、写本ばさのない革新性のある本文だったことになる。

以上のような、表記からの視点ではなく、字母という視点では、『絵入源氏』の三種類の本文は、どのようにとらえることができるのだろうか。『源氏物語』の写本の字母は、最近の研究で注目されるようになってきた⁷。変体仮名で書かれた『絵入源氏』の、字母レベルの異同を検討することにより、慶安本を手本にした万治本、小本それぞれのテキストの特質や書写意識の究明が期待できる。以前、『絵入源氏』三種類の本文を素材にし、その字母を考察したことがある（『絵入源氏』三種類の字母―「桐壺」巻から―）⁸「福岡教育大学紀要」第六二号 第一分冊 二〇一三年三月）。そこでは「桐壺」巻に限定して考察したが、今回は「帚木」巻の字母をとりあげて考察したい。

一、写本の字母―東洋大学本の場合―

今回「帚木」巻の字母の調査にあたっては、先に示した東洋大学本（東洋大学附属図書館蔵の伝阿仏尼本）、尾州家本（尾州家河内本源氏物語）を用いて、字母の集計をおこなった。両本ともに鎌倉期の写本とされ、資料的価値には定評があり、複製も公刊されている。研究もさかんで、東洋大学本はその伝流に関して議論になっている⁹。尾州家河内本も古くから注目された本で、研究の蓄積がある¹⁰。ただし、その字母に関する研究はなされていない。この両本の「帚木」巻の使用字母の一覧表を作成した。（表2）（表3）である。

写本の特徴は、使用字母の多様さにある。ひらがな一字を、多様な字母で表記する傾向が高いのである。もちろん、一字一字母で表記する仮名もある。一字一字母の例は、東洋大学本は六例、尾州家本は九例確認できる。しかし、一字を二字母以上で表記する例は、東洋大学本は四二例、尾州家本は三九例ある。使用字母の総計は、東洋大学本が一一七例、尾州家本は一〇二例。パーセンテージに換算すると、東洋大学本は一字一字母が三三%、一字多字母が六八%。尾州家本は一字一字母が一九%、一字多字母が八一%。一字多字母が圧倒的に多いことがわかる。『絵入源氏』三本の使用字母の一覧表（表4）と比較してみると、版本の『絵入源氏』は用いている字母が少ない。（表5）は、使用する字母数をまとめて表にしたものである。写本の方が一字多字母のウェイトが高く、版本は一字一字母の傾向が高い。割合からすると、慶安本は一字一字母が二九%、一字多字母が七一%。万治本は一字一字母が三一%、一字多字母が六九%。小本は一字一字母が三五%、一字多字母が六五%となる。また、字母の総数も、写本は一〇〇をこえる字母を用

〈表2〉東洋大学本「は>き木」字母表

仮名	字母					合計
あ	安354	阿11				365
い	以453	伊3				456
う	宇319					319
え	衣142	盈6	江1			149
お	於231					231
か	可996	加75	閑13			1084
き	幾683	起3	支1			687
く	久506	具15				521
け	遣136	計123	気60	个40	希2	360
こ	己327	古116				443
さ	左421	佐13				434
し	之985	志48	新2			1035
す	寸204	須48	春46	寿39		337
せ	世100	勢24				124
そ	曾185	楚6	所5			196
た	多626	堂104	太4			734
ち	知212	地3	千1			216
つ	川334	徒55				389
て	天622	帝23				645
と	止1007	登46				1053
な	奈727	那110				837
に	爾567	仁113	耳24	丹14	二3	721
ぬ	奴122	怒4				126
ね	祢79	年3				82

仮名	字母					合計
の	乃620	能47				667
は	八411	者266	波42	半41	盤27	787
ひ	比330	日63	飛10	悲7		410
ふ	不163	布48	婦18			229
へ	部342	遍4				346
ほ	保104	本100				204
ま	末226	満189	万84			499
み	見109	三109	美92			310
む	武213	無20				233
め	免167	女74				241
も	毛582	裳35				617
や	也224					224
ゆ	由66	遊5				71
よ	与181					181
ら	良456	羅37				493
り	利352	里218	梨1			571
る	留500	累43	流6	類3		552
れ	礼341	連27				368
ろ	呂69	路38				107
わ	王65	和57				122
ゐ	井23	為5				28
ゑ	恵41					41
を	遠366	越108				474
ん	无142					142

〈表3〉尾州家河内本「帚木」字母表

仮名	字母					合計
あ	安368	阿17				385
い	以492	伊4				496
う	宇354					354
え	衣157	江11				168
お	於378					378
か	可822	加304	閑3			1129
き	幾692	起17				709
く	久519	具1				520
け	計125	遣124	気69	个44	希1	363
こ	己475	古77				552
さ	左380	佐52				432
し	之1033	志25	新3			1061
す	寸178	春129	須27			334
せ	世101	勢23				124
そ	曾201	楚1				202
た	堂427	多347	太29			803
ち	知234					234
つ	川370	徒31				401
て	天652					652
と	止1067	登11				1078
な	奈862	那38				900
に	爾606	仁129	耳1			736
ぬ	奴122	怒5				127
ね	祢80					80

仮名	字母					合計
の	乃567	能111				678
は	八462	者265	波66	盤19	半3	815
ひ	比321	飛63	悲5			389
ふ	不206	布37				243
へ	部379	辺1				380
ほ	保136	本95				231
ま	末482	万39	満37			558
み	三177	美69	見3			249
む	武119					119
め	女156	免91				247
も	毛624	裳4				628
や	也238					238
ゆ	由65	遊9				74
よ	与202					202
ら	良475	羅22				497
り	利382	里214	梨1			597
る	留518	累23	類6			547
れ	礼382	連4				386
ろ	呂247	路2				249
わ	和114	王7				121
ゐ	為20	井7				27
ゑ	恵30	衛1				31
を	遠278	越117				395
ん	无252					252

〈表4〉『絵入源氏』「帚木」巻・三種類の字母表

仮名	慶安本・字母					合計	万治本・字母					合計	小本・字母					合計
あ	安259	阿99				358	安294	阿7				301	安374	阿7				381
い	以395					395	以395					395	以435					435
う	宇309					309	宇311					311	宇373					373
え	衣147					147	衣145					145	衣149					149
お	於328					328	於277					277	於315					315
か	可897	加11				908	可877	加37				914	可920	加36				956
が	可176	加1				177	可165	加1				166	可169	加2				171
き	幾579	起7				586	幾442	起122	支1			565	幾514	起149				663
ぎ	幾40	起1				41	幾33	起7				40	幾36	起9				45
く	久470					470	久468					468	久485					485
ぐ	久45					45	久41					41	久46					46
け	計166	个68	遣8	気4	希1	247	計148	个96	希4	遣3	気3	254	計153	遣81	个39			273
げ	計86	个3	遣1			90	計82	个1	希1			84	計55	遣32	个1			88
こ	己437					437	己383	古2				385	己454	古4				458
ご	己36					36	己30					30	己32	古1				33
さ	左360	佐4				364	左347	佐21				368	左347	佐26				373
ざ	左61					61	左50	佐5				55	左60	佐1				61
し	之735	志191				926	之766	志164				930	之769	志195				964
じ	之83	志11				94	之82	志8				90	之80	志26				106
す	寸211	春16	須1			228	寸181	春49	須4			234	寸173	春60	須5			238
ず	寸97	須3	春3			103	寸76	須10	春9			95	寸71	須15	春13			99
せ	世118					118	世117	勢1				118	世116	勢5				121
ぜ	世5					5	世4					4	世5					5
そ	曾150					150	曾150	楚2				152	曾155					155
ぞ	曾46					46	曾43					43	曾44					44
た	多571	太22				593	多559	太18	堂1			578	多574	堂36	太2			612
だ	多90	太1				91	多83					83	多85	堂3				88
ち	知188	地1				189	知180	地5				185	知239					239
ぢ	知22					22	知20					20	知23					23
つ	川264	津8	徒3			275	川260	徒4				264	川266	津11	徒9			286
づ	川108	津5	徒1			114	川107	徒6				113	川107	津3	徒1			111
て	天521	亭20				541	天531	帝2				533	天547					547
で	天88	亭1				89	天80					80	天89					89
と	止838	登7				845	止829	登9				838	止889	登9				898
ど	止251	登1				252	止238	登4				242	止258	登1				259
な	奈795	那40				835	奈818	那11				829	奈829	那43				872
に	爾709	仁10	耳5	丹2		726	爾515	仁144	丹55	耳9		723	爾467	仁262	耳1			730
ぬ	奴127	怒2				129	奴129					129	奴129					129
ね	年57	祢23				80	祢57	年22				79	年46	祢38				84
の	乃418	能241	農1			660	乃531	能113	農1			645	乃497	能180				677
は	八219	者215	波102	盤3		539	八352	者124	盤43	波14		533	八299	者208	波57	盤3		567
ば	八120	者82	波39			241	八107	者105	盤23	波2		237	八137	者78	波23			238
ひ	比387	飛2	悲1			390	比379	飛4				383	比394	飛3				397
び	比46					46	比43					43	比47					47
ふ	不210	布2	婦1			213	不210	婦2	布1			213	不204	婦14				218
ぶ	不17					17	不16					16	不25	婦1				26

へ	部203	遍2				205	部208	遍2				210	部230	遍1			231
べ	部153	遍5				158	部153	遍1				155	部150				150
ほ	保107	本11				118	保75	本53				128	保127	本22			149
ぼ	保72	本4				76	保53	本12				65	保59	本7			66
ま	末381	満47				428	末265	満118	万16			399	末352	満84	万6		442
み	三229	美67	見1			297	三167	美50	見4			221	三171	美142	見1		314
む	武96	無1				97	武91					91	武101				101
め	女222	免15				237	女232	免5				237	女225	免22			247
も	毛607					607	毛544					544	毛592				592
や	也226					226	也227					227	也262				262
ゆ	由48	遊8				56	由56	遊1				57	由73				73
よ	与172					172	与179					179	与183				183
ら	良500					500	良501					501	良503				503
り	利545	里21				566	利510	里18				528	利512	里75			587
る	留534	累19	流2	類1		556	留547	流5				552	留519	流42			561
れ	礼339	連7				346	礼293	連38				331	礼309	連63			372
ろ	呂117	路1				118	呂88					88	呂91	路18			109
わ	和85	王17				102	和87	王17				104	和70	王51			121
ゐ	為31	井1				32	為30					30	為36	井1			37
ゑ	恵25					25	恵24					24	恵28				28
を	遠339	越33				372	遠370	越1				371	遠318	越65			383
ん	无272					272	无278					278	无294				294

〈表5〉『絵入源氏』三種類の使用字母数、及び写本の使用字母数

字母数	1	2	3	4	5	総数
慶安本	14	24	6	3	1	97
万治本	15	23	7	2	1	95
小 本	17	23	7	1	0	88
東洋大	6	25	11	3	2	111
尾州家	9	28	9	0	2	102

いているが、『絵入源氏』は一〇〇には届かず、慶安本九七、万治本九五、小本八八である。この結果から、写本は多様な字母を用い、一字多字母の傾向が高く、版本は字母を抑制し、一字一字母の傾向が高い、ととりあえずは言えそうである。版本はさまざまな階層の人間が手に取る本であり、字母は少なく抑えられ、読みやすさを優先していた。一方、写本はある程度の教養を持つ人が読者となるため、多様な字母で書くことができる。能筆によるものであれば手鑑的機能も期待されていたはずで、その場合は、敢えて字母を多様に示すという教育的配慮によって書写した場合も想定できる。

つか気付いたことがあるので、ここに記しておきたい。字母の調査をしていると、写本版本に限らず、ひらがなの字母なのか、漢字なのか判別に迷うことがある。近世の版本はひらがなの字母と漢字は明確に書き分ける意識があるのに対して、写本はひらがなの字母と漢字を書き分ける意識が明確ではないような印象を受ける。写本は、ひらがなの字母と漢字の境界が緩やかなのである。伝わればよいというところに眼目があり、現在の我々が配慮するはずの表記の統一などという意識は薄かった。写本の字母の用い方は、どこことなく夏目漱石の自筆原稿などを連想させる¹¹。夏目漱石の自筆原稿は漢字を用いた独自の当て字があること

が知られているが、写本も同様で、漢字を意識しながら字母を用いる、いわゆる当て字のような感覚で字母を用いていると感じられる。字母でありながら漢字の表意性を期待した、当て字のような仮名もあるということだ。仮名（表音）と漢字（表意）のボーダーライン上のものである。したがって、仮名であるのか漢字であるのかの弁別は、判断が難しい¹²。書写者にどのような意識で書いたのかを聞き取ることができない以上は、書かれた文字情報で判断せねばならないことになる。写本のひらがなの字母か漢字かで判別が難しい例を見ていきたい。

東洋大学本に「こと葉」「ことの葉」の用例がある。「葉」は、ひらがなの字母でもある。したがって、書写者が「ことは」とひらがなを書くつもりで「葉」と字母を書いたのか、それとも「こと葉」と漢字を書くつもりで「葉」と漢字を書いたのか、「葉」が字母なのか漢字なのか、にわかに判定できない。東洋大学本の「帚木」巻では「言葉」は二例、「言の葉」は三例の用例がある。これらの用例を、字母レベルで確認していくと、「已止乃葉」（一四丁オ・二七丁ウ）、「已止葉」（一七丁オ）、「已止波」（三〇丁オ）、「已止乃者」（四八丁ウ）となっている。「葉」は三例、「波」、「者」はそれぞれ一例である。東洋大学本の「は」の字母は、「八」「者」「波」「半」「盤」が用いられている。「葉」は「ことのことは」「こと葉」の「葉」にしか認められないことから、ひらがなの字母として「葉」が用いられたのではなく、「ことの葉」「こと葉」と漢字として用いたのではないかと考えられる。ただ、三〇丁オや四八丁ウは、「ことは」「ことのは」に、「波」「者」と、明らかにひらがな表記にしているところが解せない。どうせなら「ことは」「ことのは」の「は」はすべて漢字の「葉」で統一してほしい、と考えるのは、近代テキストに馴染んだ人間の狭量な考えといえる。近代テキストは表記の統一にこだ

わるから、この不統一は落ち着かなくなるところだ。ただ、この「ことは」「ことのは」を、「波」「者」とする例は、巻の後半部に見られることから、書写の当初は「こと葉」「ことの葉」と漢字での統一を心がけていたものが、書写がすすむにつれてその意識が弛緩し、うっかりひらがな表記になってしまったとも、あるいは前半は、漢字にできるものは漢字に改める、読解的な姿勢で書写していたものの、後半はめんどくさくなり、親本通りの表記のまま写したという、書写態度の変化とも考えられる。前近代テキストは、伝えることに重点が置かれており、表記の統一は意識していない、すなわち表記の優先順位が低いテキストなのである。大内英範は「高木本の書写方法」の論文で、東洋大学本の書写方法を考察している。東洋大学本は機械的な書写がおこなわれており、「行詰め字配りまでは親本のまま」「字数を変えないようにするため」に、漢字仮名の別なども、ほぼ親本のまま」と推定している¹³。大内論文では、字母レベルでの考察はなされていないが、字母レベルで、コピーするように写していたとしたら、親本での字母の用い方が問題ということになる。いささか話が脱線したが、「こと葉」「ことの葉」のように一定の言葉に用いられる表記である場合は漢字として認定した。

ほかにも頭を悩ませる例は数多くあるが、あと二例ほど例示しておきたい。一つは、「日」という字母と漢字である。東洋大学本では「ひ」の字母に「比」「日」「悲」が確認できる。「日」は、例えば「九日」（二七丁ウ）、「五六日」（五四丁オ）、「昨日」（五五丁ウ）のように、明らかな漢字である場合は問題はないが、「日ころ」（二二丁ウ・二三丁オ）のように、漢字としても、ひらがなとしてもとれる場合、字母か漢字か迷うところではある。東洋大学本の場合、字母の「日」は、「思ひ」の「ひ」に「日」が三四例と多く用いられ、ほかには「ひとつ」「ひと

り」「ひとたひ」「ひと所」など、数字の「一」に関連する語に「日」を用いることが多く、字母の「日」を用いるさいには偏りがある。こう考えると「ひころ」の「日」は漢字として判定して問題ないと判断した。いま一つは、「心地」の「地」は字母なのか漢字なのかという点である。東洋大学本は「ち」の字母に「知」「地」「千」を用いる。「心地」の単語は、「心地」と表記される例が十六例、「古・地」が一例、「心知」が一例となっている。¹⁴「地」が一七例で大勢を占めるが、「心知」が一例だけある。「心ち」と、仮名の字母として「地」が用いられたとも考えられなくもない。「地」が字母として用いられる例は「満地／止利」(六丁ウ・「／」は改行を意味する、以下同じ)、「万川里古地」(一〇丁オ)、「不留／己多地」(一五丁オ)の三例がある。これらの「地」は明らかに字母として用いられた例であるが、字母の「地」の例を見る限り、「地」が特定の言葉に用いられる傾向のある字母とは言えないため、「心」に下接する「地」は、漢字として弁別してよいと判断した。このように、実は字母として認定するか、漢字として認定するか、微妙な例は多い。一字一字母で書くことが制定されている我々は、ひらがなと漢字の弁別をほぼ完璧に行える文化のもとにある。そのために漢字とひらがなは容易に峻別しうるものとして考えがちなのだが、字母と漢字の弁別が緩やかであった写本では、はたして漢字を意識して書かれたのか、ひらがなを意識して書かれたものなのか、にわかに判断できないところがある。

二、写本の字母―尾州家本の場合―

尾州家本の「帚木」巻では、先の東洋大学本で問題になった「葉」「日」「地」という字母は用いておらず、これらの字については、漢字と

字母の区別で悩むことはない。ただ、尾州家本は尾州家本で、漢字かひらがなの字母かで迷う、悩ましいところがある。尾州家本の字母と漢字の問題で示唆的な指摘がある。加藤洋介「河内本本文の成立―「舊尾州家河内本源氏物語存疑」続紹」¹⁵である。そのそれによると「見る」の意味の「み」はすべて「見」へと修正され、逆に「見る」の意味でない語に「見」が用いられている場合は、そのことごとくが「み」へと厳密に訂正されているのである」とのことで、尾州家本のいくつかの巻で、ひらがなの字母「美」「三」を擦消訂正し、「見」の漢字に改める、逆に字母の「見」も「美」や「三」に訂正されている、と指摘している。「帚木」巻においてもそうした訂正が行われていると、尾州家本の「見」と表記されたところは、動詞「見る」、およびその派生語などが多い。ただし、字母として「見」が用いられなかったかというところ、そういうわけではなく、僅かながら三例「見」を字母に用いている例が確認できる。¹⁷「見」を改める作業にも、いくつか見落としがあったことになるのか。加藤洋介は、尾州家本は時を経ての何段階かの作業が行われた本文としており、その一環として「見」の訂正作業があったとする。岡嶋偉久子は、「見」の訂正作業は「本文書写及び本文改訂のしばらく後であるにしても、それほどには時を経ているもの」とみて誤りはないだろうと思われる¹⁸と結論づけている。「美」「三」をわざわざ擦消訂正し、その上に「見」を書くということは、明らかに漢字を意識しての行為である。尾州家本というテキストは、動詞「見る」やその関連語の漢字に敏感だった写本と言える。こうした、漢字を意識したテキストの作成は、河内学派の注釈の営みとも連動するはずで、素寂の『紫明抄』を瞥見すると、その注釈は、和語にどの漢字をあてはめるかという

問題意識に貫かれていることがわかる。「みる」の「み」は、「見」という漢字として読みたい、いや読むべきだ、という欲求は、注釈的意識によっているわけで、尾州家本を考えるさいに、そうした意識を無視することはありえないことになる。河内本の特徴とされる句切りの朱点などは、注釈的意識の最たるものだ。和文にとって、どこで本文を区切るかという句読点の問題は、今も昔も大きな問題であり、和文の訓詁注釈は、どこに句読点を付すかにその学問的基礎がある。河内本とはアプリオリに注釈的意識の潜在する本文であり、漢字に敏感な本文であったことになる。

尾州家本が、漢字とひらがなの字母の差異にセンシティブであったことは、「けしき」や「けはひ」の字母の用い方からも推測できる。尾州家本「帚木」巻には、「けしき」が二四例、「けはひ」が一五例あるが、その「け」には「氣」が主として使われており、「計」の字母は「けしき」で一例、「けはひ」で二例用いられているだけである。¹⁹「氣」の字母は、「け(げ)」の接尾語に使われる傾向も高く、字母として用いているのか、漢字として用いているのか迷うところである。『紫明抄』は、「帚木」巻の「そのけはひこよなるへし」の注として「景氣^{ケハヒ}」との漢字を示している²⁰から、河内学派の共通理解として「けはひ」の「け」は、意識的に「氣」を用いる不文律があったとも考えられる。ただ、その場合は、漢字というよりはひらがなと漢字の中間にあるような当て字の性格として位置づけられる。とすると、「け(げ)」などの接尾語に「氣」が多く用いられるのも、漢字とひらがなの字母のボーダーライン上の、当て字の可能性もある。読み手としても、そうした当て字のようなありかたが読みやすかったのであろう。とりあえず本稿では、この「氣」はひらがなとして判断している。その理由としては、少数とはい

え、別の字母でも表記されていることや、「見」の訂正のように明確な漢字であるとする決め手に欠けることなどの理由によっている。「帚木」巻では用例はなかったが、「本意^{ほんい}」などの語彙は、ひらがな漢字かで頭を抱えてしまうところである。漢字だともひらがなの字母だとも、はたまたどちらか一方が漢字で、一方がひらがなの字母だとも言えるからだ。楷書体であれば文句なしで漢字と判定できるが、写本ではそのようなことは稀で、崩された字体で書かれてあり、字体のみで判定はできない。こういう場合、その写本で「ほ」と「い」の字母の用いられ方や、字体の崩され方などにより判断するしかない。漢字と字母の区分は、一つ一つの写本の用字を検討するよりほかになく、それぞれの写本の性格を見極めなければならないということだ。

我々は、漢字とひらがなを断絶したもの、すなわち、漢字とひらがなはそれぞれ独立した島ととらえている。しかし、おそらく写本の時代の人々にとって、漢字とひらがなは連続したもの、陸続きのものであったはずである。しかし時代の波により、地続きの箇所が寸断されていき、やがて島となった、というのが真相だろう。

三、『絵入源氏』三種類の使用字母

「桐壺」巻での、『絵入源氏』三種類の使用字母と、今回調査した〈表4〉の「帚木」巻の使用字母を見比べると、大部の字母の変更はないものの、用いている字母が若干ながら異なっている。それぞれの本で、「桐壺」巻と「帚木」巻で、異なる字母を用いているケースを抜き出してみる。慶安本の、「桐壺」巻にあって「帚木」巻にない字母は、「勢(せ)」「日(ひ)」。「帚木」巻にあって「桐壺」巻にない字母は、「丹

(に)「怒(ぬ)」「農(の)」「飛(ひ)」「悲(ひ)」「流(る)」「類(る)」
 「連(れ)」「路(ろ)」。万治本の、「桐壺」巻にあって「帚木」巻にない
 字母は、「無(む)」「路(ろ)」「井(ゐ)」。「帚木」巻にあって「桐壺」
 巻にない字母は、「希(き)」「氣(け)」「楚(そ)」「堂(た)」「帝(て)」
 「農(の)」「飛(ひ)」「婦(ふ)」「布(ふ)」「遍(へ)」。小本の、「桐
 壺」巻にあって「帚木」巻にない字母は、「氣(け)」「日(ひ)」「遊
 (ゆ)」「累(る)」。「帚木」巻にあって「桐壺」巻にない字母は「耳
 (に)」である。

「桐壺」巻での、『絵入源氏』三種類の字母は、多少の増減はあるにせ
 よ、ほぼ同じ字母の数であった。ただ「帚木」巻での、使用字母の総数
 を見ると、それぞれの字母数の数に開きがでている。「桐壺」巻は、源
 氏物語の最初の巻であるゆえに、読者は必ずといっていいほど読む巻で
 ある。そのために、それぞれの本の制作者は気を配って制作していたは
 ずだ。慶安本は読みやすさを考え、使用字母を抑制していた。万治本と
 小本は、その慶安本に準じ、使用字母に開きがないように心がけて制作
 されていた。しかし「帚木」巻になると、そうした意識が緩んでいき、
 それぞれの制作者の地が出てきてきた、とも考えられる。いわば「桐
 壺」巻は余所行きの顔だったのであり、「帚木」巻ではその余所行きの
 顔から地顔が徐々に出てきたのである。源氏物語は五四帖の大部である
 から、その制作がすすむにつれて、だんだんと普段使っている字母の使
 い方に近づいていく、ということが考えられる。我々の普段の生活で
 も、ノートの最初は気を入れて余所行きの綺麗な字で書いていたが、だ
 んだんと意識が弛緩していき、最後の方は殴り書きに近い普段の文字に
 なるということがしばしばあるが、それに近いものが書写の現場でお
 こっていたということだ。あるいは数人によって制作が分担されていた

としたら、制作者によって字母の傾向が変わることも予想される。今西
 祐一郎は、漢字使用率から伝本の様相の探究を示唆している²¹が、それ
 は字母というレベルでも応用できる。

慶安本、万治本ともに、「桐壺」巻にあって「帚木」巻にない字母は、
 慶安本が二例、万治本が三例と少ないが、「帚木」巻にあって「桐壺」
 巻にない字母は、慶安本が九例、万治本が一〇例と多い。慶安本、万治
 本は「帚木」巻になると字母数が増加しているといえる。「桐壺」巻で
 は、字母数を抑えていたが、「帚木」巻ではその意識が薄まっているの
 である。一方、小本は、「桐壺」巻にあって「帚木」巻にない字母は四
 例で、「帚木」巻にあって「桐壺」巻にない字母は一例である。このこ
 とから、小本は、慶安本、万治本とは逆に、「帚木」巻になってより字
 母数を抑える意識が強まっているのである。先に検討したように、小本
 の性格は、漢字をひらがなにする傾向が強いところに特徴があった。本
 文の漢字含有率という視点から見れば、小本は漢字も少なく、写本ばさ
 のある保守的な本文である。ところが、使用字母という視点から見
 と、小本は写本性の低い本文である。なぜならば、使用字母が抑制さ
 れ、多様な字母を用いない傾向があるからで、より版本らしさ、革新性
 のある本文といえる。ひらがな／漢字の表記という点では、ひらがなを
 多く用い、写本性が高いが、字母という点では、その数を抑制している
 ことから、写本ばさの低い本文になっているのである。小本は漢字が少
 なく、ひらがなを多用する読みづらい本文になったがゆえに、ひらがな
 の字母は抑制し、読みやすさを担保しているとも考えられる。

特定のひらがなを対象に、同文での、慶安本、万治本、小本での字母
 の表記を比較していきたい。なお、比較にさいして、三本のうち、いず
 れかの本が漢字を用いており、字母が採取できない場合、カウントして

いない。

慶安本、万治本、小本で、字母の用い方が異なる字に「ね」がある。「ね」は「年」と「祢」の字母があるが、慶安本は「年」が五七例と多く、「祢」は二三例である。慶安本は「年」をよく使う。それに対して、万治本は「祢」が五七例、「年」が二三例で、「祢」の方が多い。小本は慶安本に近く「年」が四六例、「祢」は三八例である。「桐壺」巻では、慶安本の「ね」は、「年」一八例、「祢」一六例と、ほぼ同数と言ってよく、特にどちらを多く用いるというわけではなかったが、「帚木」巻になると「年」を多く用いるようになっていく。「桐壺」巻と「帚木」巻の「ね」の使用字母数を見比べると、「桐壺」巻では、万治本の「ね」は、「祢」が二三例、「年」が一一例で、もともと万治本は「祢」を多く使っていることがわかる。万治本は「桐壺」巻でも「帚木」巻でも「祢」を多く用いるのである。「桐壺」巻では、小本は「祢」を二四例、「年」を一七例で、「祢」を多く用いているが、「帚木」巻では「年」を多く用いるようになっており、変化している。小本は慶安本の字母の用い方に同調しているのである。同文での三本の「ね」の用い方を比較していくと、次の〈表6〉となる。

〈表6〉『絵入源氏』三本の「ね」字母の比較

パターン				
年	祢	年	年	慶安
祢	祢	年	祢	万治
祢	祢	年	年	小本
12	17	17	25	実数
15	22	22	32	%

パターン				
	祢	祢	年	慶安
		年	祢	万治
		祢	年	小本
	1	3	3	実数
	1	4	4	%

三本ともに共通する字母は、三四例になる。パーセンテージでは四四％であり、慶安本の字母を、万治本、小本ともにおおむね受け継いでいると言える。ただし、慶安本と万治本の字母が異なる例は三八例見られ、四八％にのぼる。慶安本と小本の字母が異なる例は一八例で、二三％である。このことから、「ね」の字に関しては、万治本は慶安本の字母を改める傾向が高く、それに対して小本は慶安本の字母に同調する傾向があるといえる。おそらく万治本の制作者は「ね」に関しては「祢」の字母を多く用い、「年」はさほど用いない人物であったのだろう。「桐壺」巻では、慶安本は「祢」と「年」をほぼ同じように用いていたために、さほどの違いは生まれなかったが、慶安本は「帚木」巻になると「年」を多く用いだし、万治本の制作者はその「年」を「祢」に改めることが多くなったと考えられる。小本は、慶安本の「ね」には同調しており、字母の変更はさほどおこなわなかったのである。

「桐壺」巻で問題になった「わ」の字母についても考えたい。「桐壺」巻では、「わ」の字母は、慶安本が「和」で五〇例、「王」が六例。それと同様に、万治本は「和」が四八例、「王」が六例で、慶安本と似通っている。慶安本、万治本ともに「わ」は「和」を主として用いる。それに対して小本は「王」が三四例、「和」は二七例で、「王」を多く用いている。「桐壺」巻では、「わ」の字母については、「和」を多用する慶安本、万治本と、「王」を多用する小本という対立があった。「帚木」巻でも、慶安本の「わ」の字母は、「和」が一七例、「王」が一七例、万治本も「和」が八七例、「王」が一七例と、「桐壺」巻とほぼ同じような用い方である。ところが、小本は「和」が七〇例、「王」が五一例と、慶安本の「和」を多用する字母の用い方に近づいているのである。「帚木」巻での、同文での三本の「わ」の字母を比較してみると、〈表7〉と

なった。

〈表7〉『絵入源氏』三本の「わ」字母の比較

パターン				
王	王	和	和	慶安
王	和	和	和	万治
王	王	王	和	小本
5	9	18	55	実数
5	9	18	56	%

パターン				
王	王	和	和	慶安
王	和	王	王	万治
和	和	王	和	小本
1	2	4	4	実数
1	2	4	4	%

「わ」の字母の数だけを見ていると、小本は慶安本・万治本の「和」を多く用いるテキストに近づいているように見えたが、「わ」の字母の比較を見るとどうなるのだろうか。慶安本の字母と小本の字母が食い違う例は、小本の場合は二五例、慶安本の字母と万治本の字母が食い違う例の一九例と比べると、小本の方が食い違う例は多い。小本と比べると、万治本は慶安本の字母に引きずられる例が多いが、小本は慶安本の字母を改める傾向があることには変わりはない。変わりはないものの、その傾向は「桐壺」巻と比べると弱まっていることは確かである。慶安本と万治本が一致する例は七九例で、慶安本と小本が一致する例は七三例。小本は徐々にだが慶安本の字母の用い方に同調してきていると言える。

「桐壺」巻での字母の考察では、万治本は慶安本の字母をそのまま写す傾向が高く、小本は慶安本の字母とは違ったものに改める傾向が高かった。しかし「帚木」巻では、「ね」に関しては、万治本が「祢」を多く用い、慶安本や小本の「年」を多く用いるありかたとは異なっている。万治本は慶安本の字母をそのまま用いることが多いが、一部のひら

がなは改めることもあるということだ。また「わ」の字母の検討からも明らかのように、「帚木」巻では、小本が「和」の字母を用いて、慶安本に同調する姿勢が強くなっている。「桐壺」巻では、慶安本の「和」の多用に対して、小本は「王」を多用しており、対立していたものが、「帚木」巻で小本は「和」を多く用いる態度に変化している。小本は慶安本に同調してきているのである。

おわりに

「帚木」巻に限定しての考察であったが、ひとまずまとめておきたい。今回取り上げた鎌倉期の写本は、いずれも一字多字母の比率が高く、字母の総計も一〇〇を超えていた。写本は、それだけ多様な字母を用いていたことになる。それに対して、『絵入源氏』三種類の版本の字母は、一字一字母の比率が高く、用いている字母の総計も一〇〇より少なく、写本と比較すると、版本の『絵入源氏』は字母の数を抑制していることがわかる。濱田啓介は、近世版本に使用される仮名字体を調査し、その使用字体が収斂、合理化していくと指摘している²²。用いられる字母も、時代が新しくなるにつれて、より収斂され合理化されていくわけで、『絵入源氏』もその例に漏れず、慶安本、万治本、小本と、その出版年が新しくなるにつれて、用いられる字母も徐々に少なくなっている。

小本はひらがなへの志向が強いテキストで、表記を見ても、慶安本の漢字をひらがなに改める傾向がある。したがって、ひらがなを多用し、表記という点からは、写本性の高い本、すなわち保守的な本と言えた。しかし、字母という視点から見ると、用いる字母を抑制するなど、写本性の低い、革新的な本になっている。『源氏物語』を写本で親しんでい

た階層の人間からすると、小本はひらがなを多用した、写本はい本ではあるが、そのひらがなの字母は抑制され、格段に読みやすい本になっている。写本を読み慣れている人間からすると、小本を読みながら、古くて新しいという不思議な感覚にとらわれていたことであろう。

「桐壺」巻と「帚木」巻での字母の用いられ方を比較すると、いくつが興味深い現象がみられた。万治本は、慶安本を忠実に写し、字母の用い方も似ているが、「ね」の字母に関しては、慶安本とは異なった字母を主として用いていることが明らかとなった。「ね」の字母は、慶安本は「年」を主として用いるが、万治本は「祢」を主として用いており、対立している。また「桐壺」巻でも問題となった「わ」の字母であるが、この字母は、慶安本、万治本ともに「和」を主として用いている。小本は「王」を主としていた。しかし、「帚木」巻では、小本も「和」を主として用いるようになっており、小本は慶安本に同調しているのである。

これまで「桐壺」巻と「帚木」巻を考察の対象としてきたが、別の巻では、結果が異なる可能性がある。なぜならば、「桐壺」巻や「帚木」巻は、『源氏物語』の最初の巻々であり、それだけ読者が手にとりやすい巻だからである。読者が読みやすい巻であるということは、制作者はそれだけ気を使って制作していたはずである。『絵入源氏』三種類のテキストの性格を究明するには、他の巻々の調査をすすめる必要がある。また、『絵入源氏』の特徴を明らかにするには、可能な限り写本の字母データも収集する必要がある。理想は『絵入源氏』五四帖の全調査、および現存するすべての写本の字母のデータ化であるが、人間に与えられた時間は有限である。

1 沼尻利通「『絵入源氏』三種類の本文表記―「帚木」巻から―」(『福岡教育大学国語科研究論集』第五五号 二〇一四年 掲載予定)。なお、本稿で用いた『絵入源氏』の本文は、慶安本は、国文学研究資料館本(サ426/2)を基軸にし、ノートルダム清心女子大学本[E16342]黒川本)、早稲田大学本(文庫30_a0007)を補助として用いた。万治本は、早稲田大学本(文庫30_a0153)を基軸にし、国文学研究資料館本(サ41/1)、大阪女子大学旧蔵本[91336/M222.1)、福井市立図書館松平文庫(文335/1)を補助として用いた。小本は、複製の『源氏物語』(日本文化資料センター 一九八四年)を基軸にし、早稲田大学本の二セット(〔へ12〕02185)(文庫30_a0153)、国文学研究資料館本(サ433/1)を補助として用いた。引用にさいしては丁数、表裏を付した。

2 なお、句読点の「。」(小本の場合は「。’)も一字として、踊り字の「く」は二字としてカウントした。傍記等はカウントしていない。

3 『阿仏尼本は、き木』(勉誠出版 二〇〇八年)。

4 『河内本源氏物語』(第一 尾張徳川黎明会 一九三五年)。なお、必要に応じて『尾州家河内本源氏物語』(第一巻 八木書店 二〇一〇年)を用いた。

5 この表の作成にあたっては、慶安本、万治本、小本のふりがな付き漢字は漢字に分類した。また傍記等は算出しておらず、本行本文の漢字とひらがなのみを対象とした。写本の見せ消ちは、消された文字を対象とし、訂正後の文字は対象としない。胡粉、擦り消し等で、元の字が抹消され、その上に書かれた文字については、可読の文字(上に書かれた読み取れる文字)を対象とした。『絵入源氏』三本、東洋大学本、尾州家河内本とも、踊り字のく(く)、ゝ(ゝ)、々や句読点の「。」などは漢字/ふりがなの弁別ができないため、字数としてカウントしていない。なお、慶安本のふりがな付き漢字は四〇四字、くは五九、くは四〇、ゝは二三、ゝは七三、々は一〇、句読点の「。」は一五四三。万治本のふりがな付き漢字は六二二字、くは六〇、くは三五、ゝは一八五、ゝは七四、々は一三、句読点の「。」は一四六一。小本のふりがな付き漢字は二一字、くは六四、くは三四、ゝは二一〇、ゝは七〇、々は九、句読点の「。」は一四七九。東洋大学

本は、くは一〇七、は二九四。尾州家河内本はくは一〇三、は三九七。

6 「文字の使用状況から見た源氏物語花散里写本」(『國學院雜誌』第一一三巻第五号(通卷二二六号) 二〇一二年五月)。

7 渋谷栄一「明融臨模本「桐壺」「帚木」「若菜上」「若菜下」帖の親本の性格について―定家親筆と非定家筆との相違及び非定家筆本の差異性を中心にして―」(『源氏物語本文のデータ化と新提言』第二号 二〇一三年三月)や、斎藤達哉「仮名文の文字調査―源氏物語花散里六八本の仮名字母と漢字―」(『専修国文』第九一号 二〇一二年九月)など。

8 字母の採集・分類は、それぞれのひらがなを構成する字母の漢字を優先し、そのくずし方は考察の対象とはしていない。字母のくずし方は、見る人間により印象が変わり、正確な分類ができないためである。字母の漢字により分類する手法(字源主義)によっている。

9 上原作和「伝阿仏尼等筆本『源氏物語』傳來史」(『光源氏物語傳來史』武蔵野書院 二〇一一年)、久保木秀夫「『源氏物語』紀州徳川家旧蔵本の行方」(『中古文学』第八五号 二〇一〇年六月)など。

10 佐々木孝浩「尾州家本源氏物語の書誌学的再考察」(『文学・語学』第一九八号 二〇一〇年十一月)など。

11 『直筆で読む「坊っちゃん」』集英社 二〇〇七年。

12 小松英雄「仮名文の発達―三つの書記様式の一つとして―」(『日本語書史原論』補訂版新装版 笠間書院 二〇〇六年)では、仮名の草体に対し、漢字は楷書体で書かれる傾向が高いことを指摘している。確かに、漢字は連綿せず、楷書体ふうに書かれることがあるが、ただし写本を見る限りでは、書体のみでの弁別は困難であることも多い。

13 『源氏物語 鎌倉期本文の研究』おうふう 二〇一〇年 一三〇頁。

14 「心地」…三丁オ、一二丁ウ、一九丁オ、一九丁ウ、二三丁ウ、二七丁ウ、四〇丁ウ、四六丁オ、四六丁ウ、四六丁オ、四七丁オ、四八丁オ、四九丁ウ、五一丁ウ、五四丁オ、五八丁ウ。「古、地」…三七丁オ。「心知」…五四丁ウ。

15 『講座平安文学論究』第一〇輯 風間書房 一九九四年。

16 「尾州家本帯木の書写様態をめぐって」(『源氏物語鎌倉期本文の研究』おう

ふう 二〇一〇年 八八頁)。

17 「加美可／可_レ見越」(七丁ウ)、「可_レ見八」(八丁オ)、「美、者左見可／知」(九丁ウ)。

18 「鎌倉期本文の成立」(『源氏物語写本の書誌学的研究』おうふう 二〇一〇年 一一七頁)。

19 「氣之幾」…四丁ウ、五丁オ、一二丁ウ、一四丁ウ、一五丁オ、一五丁オ、一八丁ウ、一八丁ウ、一九丁オ、二〇丁オ、二三丁ウ、二四丁ウ、二五丁ウ、二六丁ウ、三一丁ウ、三三丁オ、三四丁オ、三六丁オ、三八丁ウ、四一丁ウ、四二丁ウ、四六丁ウ、四八丁ウ。「計之幾」…一六丁ウ。「氣者比」…五丁ウ、六丁ウ、二三丁ウ、三一丁ウ、三四丁オ、三四丁オ、三五丁オ、三六丁ウ、三七丁ウ、三八丁ウ、三九丁ウ、四八丁オ。「計者比」…三七丁ウ、四六丁オ。

20 『紫明抄・河海抄』角川書店 一九六八年 二二頁。

21 「表記情報学」としての『源氏物語』研究」(『むらさき』第四六輯 二〇〇九年十二月)、「表記情報学」事始め―序文にかえて―」(『日本古典籍における「表記情報学」の基盤構築に関する研究』第一号 二〇一二年三月)。

22 「板行の仮名字体―その収斂的傾向について―」(『近世文学・伝達と様式に関する私見』京都大学学術出版会 二〇一〇年)。

※本研究はJSPS科研費22820043, 24720099の助成を受けたものです。